

これからも一生懸命に

舞台上、柔道に注いだ情熱。患者のため研究に取り組む誠実な姿勢。人々に希望と感動を与え続けた第一人者に褒章の知らせが届いた。「これからも一生懸命に」「一步一步やらないと」。受章者は喜びを胸に、さらなる飛躍に向け新たな一步を踏み出す。

【3面参照】

全日本柔道連盟理事

山下泰裕さん

面はゆい気持ちも

だれもが認める日本柔道の顔が全柔連理事の山下泰裕さん(四九)。ロサンゼルス五輪で足を負傷しながらの金メダルに日本中が胸を熱くした。あれから二十三年。「世界のヤマシタ」は国際柔道連盟の理事として「柔らかな心」を世界に伝えている。

世界を制した体躯(た

部町)の出身。幼いころ

から体格に恵まれ「血の気が多い、悪ゴロだった」。柔道との出会いは小学四年の時。「畳の上では、有り余る闘争心が満たされた、のめり込んだ」現役時代、二百三連勝と無敵の強さを誇った。一九八五年四月の現役最後の試合まで七年半かけ積み上げた金字塔だ。八四年のロス五輪。右ふくらはぎの筋を切るけがを、不屈の精神力で乗り越え、表彰台の一番上で流した大粒の涙が、県民を感動させた。

帰郷しての祝賀会。小

同級生の誇りとあった。「本当にうれしかった。これが私が唯一、自宅に飾っている表彰状なんですよ」現役を引退後は指導者として、何人もの世界王者を育てた。理想の選手を問うと「体が小さくても大きな相手を投げ飛ばす。そんな技が切れる選手です」と即答した。現在、柔道とその精神の普及に力を注ぐ。「五輪で勝とうが、それだけじゃ半人前。その経験をどう生かすが大事なんです。『相手に敬意を払い礼を重んじる』。道場で学んだ日本の心を世界の青少年に広めたい」。一年の三分の一を海外で過ごす生活は当分続きそうだ。(潮崎博)

春の褒章受章者喜びの声



作家・村田喜代

自分の仕

芥川賞受賞作の「鍋の中」などで知られる作家の村田喜代子さん(六三)は福岡県中間市の自宅で「自分の仕事を再確認できる良いものをいただきたい」と、紫綬褒章の喜びを語った。

「和の心を世界に伝えていきたい」と語る山下泰裕さん(神奈川県平塚市の東海大)